

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800740		
法人名	医療法人 潤幸会		
事業所名	ひまわり		
所在地	熊本県上益城郡山都町下市59番地		
自己評価作成日	令和2年12月10日	評価結果市町村受理日	令和3年3月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do">http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和2年12月22日

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地元の祭りや行事が中止になっている中、施設内の行事を増やし、利用者様のストレスの軽減に努めています。また家族様との連絡を密に毎月1回生活の様子を手紙にて知らせたり、行事の写真を撮って送っています。職員も地元出身にて話題を利用者様に提供しています。地元ならの食材にて季節を楽しんでいます。催しにも参加を行い、地域の方との交流も行っていきます。山都町一人の住民としての生活を楽しまれています。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

医療法人の一角を占めるホームは、町の中心地に位置し、17年という入居歴にもかかわらずあまりレベル低下も無く穏やかに過ごされる姿もあり、環境の変化も無く、昔から継承される祭りや職員のケア力を発揮していることが表れたホームである。コロナ禍の中に、地域へ出ながらの交流は減少はしているものの、“ひまわり祭り”を企画したり、小豆から選んでもらいながらのぜんざい会等職員が工夫しながら外出に代わりメリハリある日常とする等、ホームの目標として掲げる「チームワークを深め心をこめたケア」が表れている。防災訓練や外出時の入居者を近隣住民も見守られる等、地域密着型の事業所として確固ある基盤が作られており、コロナ収束によりこれまで行われてきた地域との交流が再開されるであろうと大いに期待したい。

### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	潤幸会の理念を基にひまわりの理念をつくっている。年度末に個人の目標を集計して次年度の目標づくりを共有している。	毎月のカンファレンス時に理念を基に振り返るとともに、職員と話し合いを重ねた目標である“チームワークを深め、心を込めたケアに努める”をより具現化して示している。その中でも職員が明るいケアに当たる事が入居者の明るさを引き出す事や、ケア記録の充実、特に職員が日々の記録を記す事等具体的に示している。	理念を具体的な目標とし、その実践に真摯に取り組まれている。更には、入居者視点での目標なども検討される事を期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ感染の情勢をみながら、八朔祭のつくりものの見学や菊展を見に行ったりの日常的な散歩を行っている。	防災訓練時に自主的に見守り協力される近隣住民や、外に出られる入居者の見守り等、何かあれば駆けつけられる等地域住民に浸透したホームである。コロナ禍にあり、これまで通りの交流は行える状況にはないが、町の中心部のホームであり、近くの菊花展見学や散歩等に住民から声掛けされている。	地域の活動予定も把握されているが、行事そのものが中止となっている。コロナが収束に向かえば、これまで交流があった自治会や老人会等との交流再開に期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進委員会での勉強会が出来ない状態である。町の保健だよりや山都だよりをもとに話したり入居者様にも見てもらっている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員さん宅を、月1回訪問して入院退院の状況を報告を行い、意見を聴いてサービスの向上を目指すようにしている。	運営推進会議はコロナ禍により一堂に会することは無いが、資料を基に状況を報告に各委員宅を回り、説明するとともに意見等を収集し、家族にも郵送し情報を共有している。運営推進会議委員と共に認知症カフェとして予定であった紅葉狩りも残念ながらホームのみで行う等これまでは委員との外出等も行われている。	充実したメンバー構成であり、ホームで勉強された内容や、防災訓練後の指導（消防関係者）等も頂くと更に充実した内容としてサービスに反映できるものと思われ、検討いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進委員会の参加をお願いし、現在は活動報告のみですが、アドバイスをもらっている。相談できる関係である。	役場より広報紙が届いたり、コロナ関係の情報が随時届き、感染対策に生かしている。また、不明な点は役場に出向きながらアドバイスを等得る等協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員からのスピーチロックを日々のケアに於いて、拘束と思える行為に対しては、その都度注意をおこなっている。身体拘束をしない様にカンファレンスで話し合っている。	院内教育としてDVDで再教育を行い、拘束の弊害等正しき認識している。職員のスピーチロック等職員同士が注意喚起している。また、転倒リスクの高い入居者対応に職員の意見にドアを開けて日中の見守り強化や夜間帯の職員と4点柵についても協議したが見守りにより使用しないこととしている。入居者の中には外に出たいや帰宅願望があるが、個々の状況を把握し、近隣住民の見守り協力を得て支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	院内教育にてDVDを見て意見交換をおこなっている。感想も書いてもらっている。管理者研修で学んだことを伝えたいと思っています。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	院内教育にて、DVDを見てもらい感想を記入してもらっている。管理者研修で学んだことを時期を見て伝えたいと思っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に家族・利用者様に説明を行い、その後質問の機会を持つようにしている。改正があった場合は、法人により手紙で知らせる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置しているが、感染予防の為現在は、利用がない状態です。家族との連絡を密に意見を聴いて職員とカンファレンスにて意見の共有を行っている。運営推進委員会にもかけるようにしている。	家族への情報発信源として、担当職員が毎月手紙や写真を送付し、内容を見て連絡される家族等おられる。また、担当職員が家族との連絡を密にし、不足物の持ち込み等を依頼している。家族からの苦情は無いが、コロナ禍の中で訪問しても良いかや、洋服や布団等寒くなってきたことへの相談が寄せられている。窓越しの面会としており、ギャラリーを活用し、写真により情報を発信している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	カンファレンスを行いその中で意見を出しやすい環境を行っている。個人面談を行い相談できる関係を行っている。	毎月のカンファレンス時や法人での委員会活動に参加し、委員会での検討内容を職員に伝達し情報を共有している。また、個人面談を通して職員の意見等を聞き取りしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	それぞれの能力に応じて職員は、利用者の担当や係を決めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修は、全員参加し意見・感想を書いてもらっている。一般の外部研修はなく管理者研修で学んだことを伝えていきたいと思う。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が、同業者の方との交流を個別に行っている。何時でも相談できる関係を行っている。得た情報は、職員に伝えている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人との面談や病院カンファレンスを行い、不安や困ったことを聴いている。職員のカンファレンスに於いて情報を共有している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の訪問時に家族の相談や不安を聴き取っている。入居後も家族へ状況報告を行い、何時でも相談できる関係を持つようになっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	情報提供表や家族との聞き取りで、必要なサービスを見極めている。リハビリが必要であれば併設の病院のPTへ相談している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は会話を日常的に重ねて、何でも言いやすい関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の要望を、必要に応じて家族に相談している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	定期的な家族からの電話や可能な限り地域の催しものに出かけ、そこでの交流を行っている。	携帯を持参し家族と連絡を取り合う入居者や、窓越しでの家族との面会、毎月馴染みの美容室へ出かける等今出来得る最大限の支援に努めている。また、この地で継承される八朔まつりが中止となり、わたがし・ヨーヨー釣り等を用意しひまわり祭りを開催する等職員の創意工夫により楽しんでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	テーブル席も孤立しない様性格を見極めて座ってもらっている。居室での利用者同士の会話もみられるようになった。トラブルが出来た時は、職員が中に入り解決するようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院にて退所された方の情報をその職員から聞いたり、家族の方と町で会った時は、気軽に声掛けを行い、関係性を継続している。職員間では、情報を共有している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	それぞれの生活スタイルを尊重しながら、月1回のカンファレンス・申し送りノートの活用で把握に努めている。	入居者の中には「したい・したくない」等意思を表示される方もおられるが、難聴により筆談で聞き取り等個々の心身の状況を把握し、カンファレンス時の検討や、申し送りノートを介して共有している。入居者の声として上がった「美容室でパーマをかけたい」との意向に、法人と相談し家族により支援される等本人本位になるよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族・ケアマネからの聞き取りを行いカンファレンスにて、経過の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中で、出来る事出来ない事を見極めて、その日の職員で共有し生活してもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の要望に対して出来る事出来ない事を見極めて、日々支援の中で気づきのカンファレンスをしている。家族の意見には出来る限り添うようにしている。	日々の職員の気づきを基に、毎月のケアカンファレンス、3ヶ月毎のモニタリングにより継続可否を見きわめたり、レベル低下に伴う家族との話し合いを行っている。家族の要望である夜間の熟睡に昼間は何かさせて欲しいや本人の気持ちとして痛みをなくしたい等に応じたプランを作成している。まあ、定期的な家族との担当者会議により要望等を聞き取りし、プランニングに反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録の他、申し送りノート・チェック表に記載し職員は情報の共有をしている。またケアカンファレンスに於いて再度確認をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時のニーズに対して柔軟に対応できるように職員間で情報の共有を行っている。法人併設の病院のPTへ相談も出来る体制である。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事が中止になっているが、中でも地域の行事があると散歩として、地域の方と交わるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居後最初の受診時家族・本人(可能なら)・職員・医師とカンファレンスを行い家族の要望を聴いている。また家族本人の要望により他病院の受診も、可能である。	かかりつけ医については本人・家族の了承のもと隣接する法人医療機関への受診を支援している。専門医については、家族や管理者も同行し状況を共有している。現在、家族の面会が制限されており、受診結果をはじめ体調に関する連絡は、電話を中心に行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	異議を認めた場合は、看護職へ報告してもらっている。受診日には気づいたことを連絡してもらっている。法人内の看護職と連携を取り受診へとつないでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	定期的に医師や看護師に経過状態を聞いている。何時でも相談できる関係をつくっている。退院後は医療情報をもとにケアカンファレンスを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居前に家族や本人と話し合ってもらい、確認をしている。グループホームでの生活ができない場合は、主治医より家族への説明が行われる。	入居時に本人・家族の希望について聞き取り、必要に応じてあらためて確認の機会をもっている。現時点では医療的支援が必要であれば、隣接する法人医療機関での対応とし、ホームではギリギリまで支援することとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	院内勉強会にて学んでいる。緊急時や急変時においては、24時間体制で併設の病院と連携が取れる体制が出来ている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人全体で年2回夜間・昼を想定して訓練を行っている。地域の方との訓練は出来ないが見守りなどの協力体制はある。居室内はタオル置き災害に備えている。	今年度は8月に夜間想定防火訓練を実施しており、訓練後には家族へ報告を行っている。1月に2回目の訓練が予定されている。居室には煙を吸入しないようタオルを準備している。近隣者には、防災面や外出傾向のある方への見守りなど安全面での協力が得られている。	今後は家族の訓練への参加や運営推進会議メンバーへの協力体制を再確認しながらアドバイスを受ける機会を持つ事も良いと思われる。取組に期待したい。また、ギャラリー玄関の水害用砂袋については、安全面から必要時のみ置かれることが望ましいと思われる。昨今の自然災害の多からず被害は、想像を超えるものがあり、今後も火災に加え自然災害についても、対応策や被害を風化させないような機会を持たれることを期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄時のケアは、穏やかに声かけ失敗に対して責めるような言動がないよう配慮している。下着の汚染も部屋かトイレに誘導しプライバシーを大事にしている。	入居者が穏やかな時間を過ごせるよう、職員優先の対応にならず、手を休め話を聞くことなどを共有している。呼称は苗字や下の名など反応や要望から決定している。身だしなみやおしゃれの支援では、訪問カットや家族による美容室への外出、お化粧をされる方もおられ、不足した際は家族に購入を依頼している。衣類の選択では自身で好みを伝えられる方もあり、要望を尊重しながらサポートしている。	一人ひとりの尊重やプライバシーに配慮した支援については、言葉使いなど今後も事例を通しながら全員が振り返りの機会を持つ事も有効と思われる。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃から利用者との会話の機会を多く持ち想いを知るきっかけとなる様にしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の決まりを優先せず利用者が、1日を穏やかに過ごして頂くために手を休め要望に応じている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	二ヶ月に1回の髪切り、馴染みの美容室への利用も要望があればできる。担当職員で衣替えを行い季節にあった洋服を着てもらっている。衣服は選んで着てもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	毎回下膳や台拭きをしてもらう。季節の乾物づくりや漬物を作ったりしている。職員が作った料理の味見をしてもらったり和やかな雰囲気を楽しまれている。	朝食と昼・夜のご飯のみホームで準備し、他は隣接する法人から届けられ個々に応じた食形態で提供している。入居者が普段の調理に関わる機会は持たれていないが、職員が持参した大根を使った一品(切りかけ大根)や運営推進会議メンバーとのカレー作りの予定は、コロナによりできなかったが入居者と職員で実現している。また、長年料理に関わってこられた女性入居者であり、「朝ごはんはしこんだつね！」と、職員に声をかける方もおられるようである。1月には小豆の選別から取り組んでぜんざい会を予定している。	誕生会食では生魚の握りずしなども提供されているが、今後は2ヶ月1回程、クッキングの日を設け、入居者の楽しみに繋げたいとしており、実現が期待される。朝食はホームで準備しており、今後も家庭的なメニューの提供に努めていかれる事を期待したい。職員1名が同じものを食べ、他の職員も味見が行われている。給食委員会に参加した際は、入居者の代弁者として目でも楽しめる食事支援につながるよう、彩りなどについても発言されることも重要と思われる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や栄養バランスは、栄養科と相談しながら行っている。水分補給は、コーヒー・お茶を選択してもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後義歯の洗浄を行っている。可能な方は、自身で行ってもらっている。夜間は義歯を洗浄剤につけ清潔保持している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人に合わせた排泄用品を使用し、安易にオムツに変更しない様にしている。夜間帯でポータブルトイレを使用されている方でも日中はトイレを使用してもらっている。	日中は基本的にトイレでの排泄を支援しており、リハビリパンツの方が殆どであるが、布パンツで過ごされる方も2名おられる。夜間のみポータブルトイレを使用される方が5名おられ、定期的に消臭液などを使用し清潔に管理している。職員会議の中で適切な排泄用品の使い分けを検討し、家族の負担軽減にも繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェック表により、ほとんどの人が下剤を使用しているので、調整を行い服用している。毎食時と10時・15時・19時・水分補給を行っている。廊下にて歩行訓練をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の曜日は決まっているが、拒否のある方は、タイミングを見計らいながら声掛けを行っている。ゆず湯や菖蒲湯にて楽しんでもらっている。	入浴日は決まっているものの、本人の希望や拒否があれば無理強いせずタイミングや誘導方法を工夫し対応している。直近の柚子湯の際は、普段拒否をされる方も喜んで入浴されたようである。身体状況から湯船に浸かることが困難な方(車いす利用者など)には、シャワー浴で対応している。	管理者は可能な限り湯船での入浴を楽しんでもらいたいと語っている。職員のチームワークで実現につながることを期待したい。浴室、脱衣所、洗濯場が一つになっており、寛いで入浴できる環境として、物品の収納方法や場所などを検討されることも必要と思われる。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その人の一人一人の生活スタイルを尊重しながら孤立されないように声掛けをおこなっている。定期的なシーツ交換・布団干しを行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤説明書をいつも見える場所に置き、変更の場合は、申し送りノート・記録に記帳する。カンファレンスに於いて確認する。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の生活歴を参考にカラオケや月1回の行事、毎日の体操やレクリエーションを行っている。また地域の保存食づくりも行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染予防の為思うように、外出ができない状態である。家族から電話をかけてもらい、本人が穏やかに過ごしてもらう様に心がけている。	コロナ禍の中、以前のような外出支援は困難な状況であるが、近隣広場で開催される催し物(クリスマスツリー・八朔祭り飾り物コンテスト・菊展など)には、散歩の時間として出かけている。散歩中は近隣者から声を掛けられることもあり、入居者も喜ばれている。この秋、雨天のため車中からの見学であったが紅葉狩りドライブは久しぶりの外出であり、ピースサインをして喜ばれるなど楽しい光景が聞き取りや写真からも確認された。	紅葉見学の際は、久しぶりの外出にいつもと違った表情や表現をされた方など新たな個々の発見が出来たようである。コロナ収束後はこれまでできなかった外出支援に取り組まれることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自身で管理できる方は、金額を家族確認の上で所持してもらっている。必要な時は、家族了解の上法人で立替請求する。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙を読めない方は、職員が代読したりして、本人に渡している。携帯電話を所持している方もおり、家族へ要望があればかけるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を玄関のみで、共用の空間には、花の臭いが嫌いな方が居られ、季節の植物を置いている。トイレもわかりやすいように、案内板を置いている。部屋の扉のガラスから中が見えるので、好きなポスター貼られる。	玄関先には季節の観葉植物の鉢を置き、水やりは入居者が当番で担当している。リビング内は特に不快な臭いなどないよう、また、トイレの案内板など使いやすさに配慮しており、入居者は居室に設置された洗面台ではなく、共用空間に置かれた懐かしいステンレス製のものを使用されている。職員自身が大切な共用空間のひとつとして、「明るく楽しいホームの雰囲気づくりに努める」ことを、今年の目標に掲げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブル席も孤立しない様に性格を見極めて座ってもらっている。最近では、テーブルを囲んでおしゃべりする姿が多くみられる。居室でも利用者同士の会話もあっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族にも新しい物でなく、馴染みの物をもって来るようお願いしている。お位牌も持参されている利用者もある。	これまでの生活環境が保てるよう、自宅にある物を持ってきて欲しいことを説明している。着慣れた衣類をはじめ、心の拠り所となるような家族の写真、位牌なども持ち込まれている。居室を迷われる方には、名札を下げ不安なく入室できるようにしている。また、扉の小窓には、個々に応じて半分や一部、絵などを目隠しとして貼られている。掃き出し窓の圧迫感のない部屋であり、日中もベッドで横になったり、外を眺めるなど自分にとって過ごしやすい時間を持たれている。	布団や衣替えについて家族より心配のお尋ねがあったことで、ホームでも必要な電話連絡を入れ、安心に繋げている。家族の面会も制限されている現状であり、引き続き居室内の様子や不足の品など小まめな連絡を継続されることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	車椅子や歩行にもそれぞれの移動手段があり、整備も定期的に行っている。移動がスムーズに行えるような環境整備を行い、安全に過ごせるようにしている。		